

普通名詞による二人称指示

～間接化というストラテジー～

金井勇人

【キーワード】 二人称名詞 固有名詞 普通名詞 間接化 失礼さの回避

1. はじめに

日本語の二人称指示においては、二人称名詞（「あなた」「きみ」「おまえ」など）の使用が、ときとして指示対象に対して失礼となる。

そこで代わりに、固有名詞（「山田さん」「太郎くん」「花子ちゃん」など）¹ や、普通名詞（「先生」「課長」「お父さん」など）² が、使用されることが往々にしてある。なぜこれらが代用されるのだろうか。

本稿では、二人称名詞・固有名詞・普通名詞による二人称指示³について、それぞれの比較・対照を随時行いながら、考察していく。

2. 1. 二人称名詞の失礼さ

先述したように、二人称名詞は、指示対象に対して失礼となり得る。それは、次のような例において、確認することができる。

- (1) 「もうかえれ。おまえのような根性のくさった奴は日本人ではない。いなくてもいいから、かえれ」と一人の兵隊がいました。 『ビルマの豎琴』

¹ 固有名詞は、その場面において最も自然であるような接尾辞（ゼロも含む）が後接した形で、1つと捉える。この原則は、普通名詞についても同様とする。

² 本稿で扱う、人稱指示に使用される普通名詞とは、親族名称・職階・称号など身分や肩書を表す名詞が、その主なものとなる。

³ 本稿で考察の対象とする二人称指示は、「呼びかけ」ではなく、文内におけるものとする。

(2) それはあきらかに影村の訊問であった。加藤を或る種の容疑のもとに取調べようとしている刑事の態度にも見えた。加藤は自分の顔のほてっていくのを感じていた。いかりが顔に出て来たのである。

「いったい、**あなた**はなぜ私にそんなことを訊ねるんです」

「あなただと？」

影村はむっとしたような顔でいった。先生といわずにあなたといったことが影村には不愉快に思えたにちがいない。 『孤高の人』

(1)の「おまえ」は、指示対象に対して、明らかに失礼な言い方である。そこにはもちろん、「おまえ」の文体的な乱暴さも、要因としてある。

しかし(2)の「あなた」は、文体的には乱暴ではない。それでも上位者「影村」(教師)は、下位者「加藤」(生徒)による二人称名詞「あなた」を、不愉快に感じている。

このように、「おまえ」のみならず「あなた」も、失礼さを生じ得る、ということ、これは文体の問題ではない。二人称名詞による二人称指示そのものに、失礼さを生み出す性質が備わっているのではないだろうか。

結論を先に言うと、二人称名詞による二人称指示は直示⁴であり、そのことが、この失礼さの原因だと考えられるのである(二人称名詞が指示する「内容」は、会話の現場で初めて決定する)。

こうした言語による直示は、人に「指差し」を行うのが失礼であるのと、まさに同様の理由で、失礼なのだと考えられる。したがって二人称名詞による二人称指示は、失礼となり得る(特に上位者に対する場合)。それは、文体的に丁寧な「あなた」であっても同じことである。

しかしまた、日本語の二人称名詞は、例えば英語の you などと比べても、失礼さが強いと感じられる。次の2つの文を比べたい。

(3) **あなた**はなぜ私にそんなことを訊ねるんです

(4) (φ) なぜ私にそんなことを訊ねるんです

日本語では、構文的に、主語(主格)の表出が任意であるから、(3)(4)二様の言い方が可能となる。(3)は指示対象に対して失礼となり得るが、(4)は(指示という点からは)失礼とならない。

特別なケースを除き、「あなた」は言わなくても済む場合が多い。つまり(4)

⁴ 直示:「談話に先立って、言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取り込むこと(金水 1999: 68)」

で、大方は用が足りる（ここでは例外は考慮外）。そこを、あえて(3)を選択する場合、それは、それだけ相対的にくどい同定を行う、ということに等しい。その相対的なくどさが、日本語の二人称名詞の持つ失礼さが強い原因であろう。

一方で英語の場合、主語の表出は任意ではない。それは構文的に必須の要素である。したがって英語においては、日本語の(4)に対応する選択肢がない。だから you の使用は必然的であって、相対的にくどい同定、ではあり得ない。このことが、英語の you が（日本語と比較して）より失礼ではない理由である。

以上、日本語の二人称名詞は、強い失礼さを有する、ということを確認した。それは日本語話者の直観とも合致するだろう。

ただし、失礼さの裏返しとしての親密さを表現するため、あえてこの失礼さを表出することも、往々にしてある。

- (5) 「おお、しばらく見ないうちに大きくなったな、桃子。おまえ大きくなった
ら何になりたい」 『楡家の人びと』

このように、子供をはじめとする親しい下位者（あるいは対等者）に対してならば、失礼さが許容される。しかしそれは、親密さを意図してのものである。

この(5)のような、親密さを表すための用法を除けば、日本語における人称名詞は失礼である、と言ってよいだろう(1)(2)。するともちろん、それを回避しようという心理が働く。そのとき、人称名詞に代わるものが、(4)のような非明示か、または固有名詞・普通名詞なのである。⁵

非明示(4)の場合は、指示行為そのものを回避するのだから、失礼となり得ないことが容易に納得される。しかし、固有名詞・普通名詞を使用した場合に、失礼さが回避され得るのは、なぜだろうか。

2. 2. 直示ではない固有名詞と普通名詞

二人称指示の際に使用される固有名詞・普通名詞は、その指示が行われる以前から、指示内容が決まっている。次の(6)は、(2)を変更した、普通名詞「先生」による指示である。(7)は、普通名詞「課長」による指示である。

⁵ 「しかし、英語などでは、少なくとも成人相手の言語では、固有名詞や愛称、相手の職業などを呼びかけ位置以外で聞き手を指すために使うことは普通できない」（田窪 1997:20）

(6) **先生**はなぜ私にそんなことを訊ねるんです

(7) 「私が出張中だったのがまずかったです。課長は去年山林課においてになったばかりなので、ナメられたんですよ。いま資材課の伝票で見ましたが、市価の三倍で買わされていらっしやいますね。…」 『パニック』

少なくとも当事者間においては、(6)の「先生」や(7)の「課長」が誰を指すのかということは、この発話がなされる以前から決まっている。

ここで仮に、(7)の「課長」で指示される人物の姓を「山田」と設定する(以下同)。すると、固有名詞による指示も可能となる(8)。

(8) **山田さん**は去年山林課においてになったばかりなので、…

この「山田さん」が誰を指すのか、ということも、当事者間においては、発話の前から決まっている。

つまり、このような固有名詞・普通名詞による指示には、直示が介在しないのである。これら(6)(7)(8)が、直示を介在させた(1)(2)と比べて、より失礼でないことは、明らかだろう。固有名詞・普通名詞による指示は、このように、直示を介在させないからこそ、失礼さを回避し得るのである。

2. 3. 固有名詞の失礼さ

固有名詞も普通名詞も、直示を介在させないことにより、失礼さを回避できることを、前節で確認した。しかしあらためて両者を比べてみると、そこには失礼さの程度について、差異が見られる。

例えば、(2)を次のように変更することは、通常、とても難しいだろう。

(9) **影村さん**はなぜ私にそんなことを訊ねるんです

つまりこの場合、教師を固有名詞で指示することが、失礼となるのである。また前出の(8)も、上司を固有名詞で指示する習慣がない会社では、難しいであろう。さらに、次の(10)も示唆的である。

(10) 婚約者となっても志方は吟子を先生と呼んでいた。実際それ以外に適切な呼び方はなかった。…(中略)…

「私のような者と一緒になることに、先生は後悔していませんか」

『花埋み』

「吟子」は女医であり、「志方」は「吟子」より十三歳年下である。こうした事情があれば、二人は婚約しているのだから、「志方」は「吟子」を、固有名詞で「吟子さん」と言っても、おかしくはない。しかし「志方」には、できない。

以上から、原則的に、普通名詞は固有名詞より失礼でない、ということが結論できる。次の式において、確認しておきたい。

- (11) 失礼さの程度 : 二人称名詞 >> 固有名詞 > 普通名詞
(強>弱) (あなた) (山田さん) (課長)

一方、下位者については、対応する普通名詞が存在しない（使用できない）、という場合が多い。例えば、役職のない部下を、普通名詞で指示することは、不可能である。仮に「平社員はどう考える？」などと言うのは、非常に特別な意図がある場合を除き、不自然きわまりない。あるいは「生徒は宿題をやってきたか？」などというのも、同様である。

したがって下位者に対しては、固有名詞を使用せざるを得ない⁶（「山田はどう考える？」「佐藤君は宿題をやってきたか？」）。そのとき下位者は、固有名詞による失礼さを、その立場の弱さゆえに、受け入れねばならない（(5)も参照）。

また、下位者でなくても、適切な普通名詞が存在しない場合がある。例えば、「両親の友人」を意味する普通名詞などは、ありそうもない。

このようなとき、固有名詞は失礼である、というのは当たっていない。それは固有名詞の失礼さというのは、あくまで、対応する普通名詞との相対的な関係に基づくからである。対応する普通名詞がなければ、固有名詞も失礼とならない。

それとは反対に、対応する固有名詞を知らなければ、普通名詞を使用するしかない（名前を知らない八百屋の店員を「八百屋さん」と言う場合）。したがってそこでは、失礼さの回避は主要な意図ではない。

2. 4. 固有名詞と普通名詞の関係

前節で、原則的に、普通名詞は固有名詞より失礼ではない、ということを確認した。それでは両者はいったい、どのような関係にあるのだろうか。

- (12) 「この犬はテリヤだ」

という文は、ふつう、眼前にある一匹の犬をさしながら、口から発せられる

⁶ 他の選択肢（非明示・二人称名詞など）のことは、ここでは考えない。

ことが多い文である。こういう時、「この犬」ということばは、いうまでもなく、その眼前の、一匹の犬のことを指している。この一匹の犬は、また、個体である犬、ともいわれる。(吉田 1977 : 23)

吉田の主張を受け、本稿では暫定的に、上のような文脈における「この犬」を**個体**と呼ぶことにする。個体とは「集合の元とはなるが、それ自身は元を持たないもの(同書 : 159)」である。「この犬」は、「テリア」という集合の元となるが、「この犬」自身は、唯一無二の具体物であって、元を持たない。

さて、仮に「この犬」の固有名を「コロ」と知っていれば、次のような言い方が可能となる。

(13) コロが散歩している

この固有名詞「コロ」は、ある特定の「コロ」という固有名を持つ犬(個体)に対応する⁷。つまり固有名詞とは、個体に対応する言語表現である。

一方、「テリア」の方は、どうか。

(14) テリヤが散歩している

この「テリア」は固有名詞ではない。この「テリア」は、「この犬」「コロ」をはじめとする、テリア種に属するすべての個体(あの犬・その犬・ポチ…)を、表し得るからである。次のような言い方が可能となるのは、そのためである。

(15) どのテリアもすべてかわいい。(×どのコロもすべてかわいい)

個体の集合を**全体**と呼ぶことにすると、上記のような性質を持つ「テリア」は、全体に対応する。つまり普通名詞とは、全体に対応する言語表現である。

(16) 個体	: この犬	⇔ 固有名詞「コロ」
全体	: この犬・あの犬・その犬 …	⇔ 普通名詞「テリア」

以上から、普通名詞と固有名詞との関係は、<全体—個体>というものであることが分かる。このことを先の「課長」の例で図示すると、次のようになる。

⁷ 複数の個体が同名を有する、というケースは、記述が偶然重複したに過ぎず、それぞれは別個の固有名だと考えるべきである。

- (17) (全体) (個体の集合)
- 普通名詞「課長」——固有名詞「山田さん」
- 固有名詞「佐藤さん」 (別の課長職にある人)
- 固有名詞「高橋さん」 (")
- 固有名詞「……さん」 (")

2. 5. 普通名詞と間接化

前節で確かめたく全体一⁸個体という関係を利用したものが、普通名詞による二人称指示に他ならない。そのメカニズムは、次のようになっていよう。

- (18) 指示主体 →→→ 普通名詞「課長」 === 課長 (全体)
- ↓ (推論)
- 固有名詞「山田さん」 = 山田 (個体)

指示主体が発した普通名詞「課長」は、すべての課長に対応し得る。そして、そこに含まれるすべての課長の中から、文脈的・現場的な手がかりを元に、最も適当な個体(眼前にいる「山田」)が選ばれる⁸。この時点において初めて、普通名詞「課長」が、個体「山田」と結びつく。

この推論は<全体→個体>というメトニミー⁹を利用したものである¹⁰。つまり二人称名詞による二人称指示は、言わば間接的な指示なのである。

一方、固有名詞の場合は、そのような間接化は、もちろん介在しない。それは<個体→個体>という直接的な指示である。

固有名詞と普通名詞との失礼さの差異は、まさに、この間接化の有無による。一般に間接化は、失礼さの回避に貢献する。例えば、「この仕事は引き受けたくない」と言う代わりに、「今、ちょっと忙しいので…」などと言うのも、間接的な表現をして失礼さを回避するため、と見ることができる。

それとまったく同様に、普通名詞による指示は、間接化の介在によって失礼さを回避し得るのである。

⁸ 「山田」ではない課長を指示したいのであれば、「あの課長」などという有標な言い方をするだろう。(2.6.も参照)

⁹ メトニミー：「(現実)世界のなかで隣接関係にあるモノとモノとの間で、一方から一方へ指示がずれる現象(瀬戸 1997:105)」

¹⁰ <課長—山田>という関係を、シネクドキ関係として捉えることも可能であるが、その場合も本論の枠組みは変わらない。

シネクドキ：「より大きなカテゴリーとより小さなカテゴリーとの間の包摂関係に基づく意味的伸縮現象(瀬戸 1997:166)」

2. 6. 固有名詞+普通名詞

例えば会話の場に、課長職にある人物が複数名いるときの、普通名詞「課長」は、どの課長を指しているのかについて曖昧となり得る。そうした曖昧さを回避するためには、「山田課長」と言えばよい。

この「山田課長」のような、「固有名詞+普通名詞」というパターンも、ごく日常的に使用される。これについては、以下のように考えるべきだろう。

候補が複数いるときの「山田課長」において、前半部の「山田」は、曖昧さを回避するために必須である。それはもはや固有名詞ではない¹¹。それは言わば、弁別のためのマーカ―となるのである。「課長」という「全体」に、「山田」というマーカ―が付加された、と考えるとよいだろう。

- (19) (マーカ―) (全体) (個体の集合)
「山田」+「課長」 ─── 「山田さん」
 ├── 「佐藤さん」 (別の課長)
 ├── 「高橋さん」 (")
 ├── 「……さん」 (")

マーカ―である「山田」の役割は、最終的な指示対象「山田」を検索しやすくする、ということである。それ以上のものではない。したがって、この場合も、<全体→個体>という枠組みは変わらない。このようにして、「山田課長」も、間接化を経て、失礼さを回避し得るのである。

もっとも候補が、はじめからその場に1人しかいない場合でも、「山田課長」と言うことはできる。しかし、そのような場合、言わば押し付けがましい感じが生じるだろう。

その原因は、2.1. で述べたと同様、それが相対的にくどい同定だからである。つまり、候補が最初から一人ならば、マーカ―「山田」を付加する必要がない。そこをあえて付加するくどきが、押し付けがましいのである。

以上から、次のような式を表すことができるだろう。

- (20) 失礼さの程度： 固有名詞 > 固有名詞+普通名詞 ≥ 普通名詞
(強>弱) (山田さん) (山田課長) (課長)

¹¹ 「山田さん課長」とは言えないことから、普通名詞に前接する固有名詞が、固有名詞として完結していないことが、察せられるだろう。

2. 7. 適切な普通名詞の条件

例えば、AにとってBは、父であり、同時に学校の教師でもあるとする。Aは原則的に、授業中の教室内など「学校」（に関連した場面）で、Bを「先生」と言う。授業中、他の生徒の前で「お父さん」と言うのは、やはり不自然である。

一方、「家庭」（に関連した場面）では、AはBを「お父さん」と言う。家庭で他の家族を前に、「先生」と言うことは、やはり不自然と言わざるを得ない。

つまり指示に利用できる普通名詞は、あらかじめ指示対象の側で決まっているのではない。指示主体が、指示対象を、どのような「全体」に所属させるか、という意思によって、決まるのである。「学校」のAにとっては、「先生」という「全体」にBを所属させるのが、自然である。一方、「家庭」のAにとっては、「お父さん」という「全体」にBを所属させるのが、自然なのである。

(21)		(全体)		(個体)
	学校でのA	→	普通名詞「先生」	→→→ B
	家庭でのA	→	普通名詞「お父さん」	→ B

「人間（さん）」「哺乳類（さん）」というような普通名詞も、特別な文脈がない限り不自然である。「全体」の設定が、不必要に大き過ぎるからである。

また「容疑者」などという普通名詞は、失礼さを回避し得ない。意味的に失礼さを有する場合は、そちらが優勢となるようである。

2. 8. 普通名詞か固有名詞か

実際の場面で、普通名詞と固有名詞のどちらかが選択されるメカニズムは、次のようになっていると考えられる。

- (22) 指示対象＝上位者・疎遠な者 / 場面＝公的 etc…
→ より失礼さが許容されない →→ 普通名詞を選択する方向へ
- 指示対象＝下位者・親しい者 / 場面＝私的 etc…
→ より失礼さが許容されやすい → 固有名詞を選択する方向へ

上記の2つの力、つまり、普通名詞へ向かう力と、固有名詞へ向かう力が、せめぎ合った結果、普通名詞か固有名詞かが決定されるわけである。

対話の場面において、指示主体が、指示対象の固有名を知っているなら、直接

的な固有名詞による指示の方が、指示の精度が、明らかに高い(8)。しかし様々な理由から、失礼さを回避した方がよいと判断した場合には、指示の精度を犠牲にして、間接的な普通名詞による指示を選択するのである(7)。

こうした判断を、瞬時にかつ総合的に行い、1つの結果を出すことは、ときとして非常に難しいだろう。(23)では、このようなせめぎ合いに起因する混乱を見ることができる。

- (23) 「純子さん。尾島さんにコピーさせたの？」
「ええ、だってあそこの仕事ですものね」
と澄ましている。
「でも——気の毒よ。いくら何でも」
「社長も少し冷酷にならなきゃだめですわよ」
× × × × ×
「伸子さんだって美人よ。ただ、あんまり構わなすぎるんだわ。——あら、社長、すみません」
『女社長に乾杯!』

「伸子」は大抜擢された若い女性社長で、「純子」はその部下である。しかし同時に、二人は元「お茶くみ仲間」でもあり、今でもとても仲がよい。「純子」は普段は、「伸子」を普通名詞で「社長」と言う。しかし話が盛り上がってくると、ときに、固有名詞で「伸子さん」と言ってしまう。

ここには、上下親疎関係や場面の公私など、様々な要素¹²が複雑に絡み合っている。それが「純子」による選択を混乱させた原因である。

そうした諸要素を通して、指示主体は最終的な選択を行うわけだが、(23)の例も含めて、その選択が(故意か否かを問わず)適切でなかった場合には、何らかの表現効果が生じることと思われる。

例えば指示主体が、失礼さが許容されないような場面で、固有名詞による指示を行えば、それは失礼さとか、ぞんざいさなどといった表現効果を生じる(9)。

逆に、ある程度の失礼さが許容される場面で、普通名詞による指示を行えば、それは疎遠さや水臭さなどといった表現効果を生じるだろう(そのような場面と仮定しての(10))。

大まかには、上記の2方向の表現効果が考えられる。さらに下位区分的な表現効果についての考察は、別項に譲りたい。

¹² こうした選択を左右する場面的要素には、様々なものがあるだろう。しかし、それらを列挙することは本稿の目的ではないので、指摘するにとどめる。

3. おわりに

本稿では、普通名詞による二人称指示は、どうして失礼さを回避し得るのか、ということ考察した。その理由は、以下の2点にまとめられる。

- ・第一に、人称名詞との関係で言えば、固有名詞・普通名詞による指示は、直示を介さないために、より失礼ではない、ということである。
- ・第二に、固有名詞との関係で言えば、普通名詞による指示は、間接化を介するために、より失礼ではない、ということである。

そして、指示主体は、指示対象に対する失礼さを回避するために、二人称名詞⇒固有名詞、固有名詞⇒普通名詞、というような選択の変更を行うのである。

参考文献

- 金水 敏 1999「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」
『自然言語処理』vol. 6-4, 67-91 言語処理学会
- 小泉 保 1997『ジョークとレトリックの語用論』大修館書店
- 近藤泰弘 1990「構文的に見た指示詞の指示対象」『日本語学』vol. 9-3, 31-38
明治書院
- 鈴木孝夫 1973『ことばと文化』岩波書店
- 瀬戸賢一 1997「意味のレトリック」『文化と発想とレトリック』94-177
研究社
- 田窪行則 1997「日本語の人称表現」『視点と言語行動』13-44 くろしお出版
- 中村 明 1991『日本語レトリックの体系』岩波書店
- 三上 章 1972『現代語法序説』くろしお出版（初出 1953）
- 吉田夏彦 1977『論理と哲学の世界』新潮社
- Levinson, S. C. 1983 *Pragmatics* Cambridge University Press

金井勇人「日本語における定記述による二人称指示～メトニミーの観点から～」
日本言語学会 第124回大会（東京外国語大学 2002. 6. 16）発表原稿

引用資料

- 赤川次郎『女社長に乾杯！』 開高 健『パニック・裸の王様』
北 杜夫『榆家の人びと』 竹山道雄『ビルマの堅琴』
新田次郎『孤高の人』 渡辺淳一『花埋み』 以上、新潮文庫。

（かない はやと / 文学研究科 日本語日本文化専攻 博士後期課程2年）